

客船もたまには

〈連載(209)〉

マーケットが爆発的に成長する欧州クルーズ視察旅行 スプレnder・オブ・ザ・シーズの1週間地中海クルーズ (その2)



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂

前回に続いて、躍進する欧州でのクルーズの体験記のつづきをご紹介します。前回紹介したように、乗船したのはRCI（ロイヤル・カリビアン・インターナショナル）の運航する7万総トンの「スプレnder・オブ・ザ・シーズ」。1850人余りの満船の乗客を積んだ同船が、トルコのクシャダシを目指して、エーゲ海を東に航海しているところで今回は終わったので、その後のクルーズの様子について紹介してみたい。



深夜のミッドナイトブュフェ

クルーズ3日目の、どこにも寄港しない、ゆったりとした航海日の終わりは、船長主催のカクテルパーティ、ガラディナー、そしてスペシャル・ショーで締めくくられ

た。もちろん、さらにカジノやディスコなどは夜遅くまで賑わっていた。このように、移動しながらも船上で、ちょっとお洒落な雰囲気を楽しめるのがクルーズの一番の魅力であろう。

翌朝到着したトルコのクシャダシ港のクルーズターミナルには、たくさんの客船が停泊していた。その中にはカリブ海クルーズのパイオニア的な船や、数年前に、神戸～釜山航路の大衆クルーズに就航していたスター・クルーズの元「スーパースター・トラス」の姿もあった。欧州のクルーズマーケットの爆発と共に、新興の欧州基盤のクルーズ運航会社がたくさん出現しており、その中でもひととき元気のよいのがルイス・クルーズで、彼女は「クリスタル」と改名してその運航下で活躍をしている。

さて、クシャダシでは、巨大な都市遺跡であるエフィソスを訪れるバスツアーに参加した。こうしたオプション・ツアーは有料だが、人気のあるコースはすぐに売り切れてしまう。乗船したらすぐにオプション・ツアーの申込みをするのが肝心だ。

クルーズターミナルに隣接するバス乗り

場には、たくさんの観光バスが待っていて、次々に乗客を乗せて観光へと出かけていく。筆者の乗ったエフィソス遺跡へのバスツアーのガイドは、大学で考古学を教えている教師とのことで、遺跡の説明には熱が入っていた。こうした産官学を挙げたクルーズ観光振興の様子が興味深かった。

夕方に船は出港し、次の寄港地であるサントリーニ島を目指す。この島は絶壁に囲まれた島で、その絶壁の上に真っ白い家が並び、その中に真っ青な屋根の教会が印象的な、エーゲ海の大観光島である。

まだ暗いうちにサントリーニ島の泊地について。MSCの大型クルーズ客船「MSCアルモニア」が横に停泊しており、さらにコスタクルーズの「コスタ・マリナ」もやってきて、3隻が並んでの停泊となった。



サントリーニ島沖に停泊する3隻のクルーズ客船

ギリシア政府は、クルーズ客船のテンドーボートを通船として使用することを認めておらず、現地のボートの使用を義務付けていることから、大型クルーズ客船が複数隻同時に寄港するとボートの数が足りなくなるらしく、上陸のためのボートを待つのにずいぶんかかった。

サントリーニ島には、大型船が停泊できる岸壁はなく、テンドーボートはギリシア

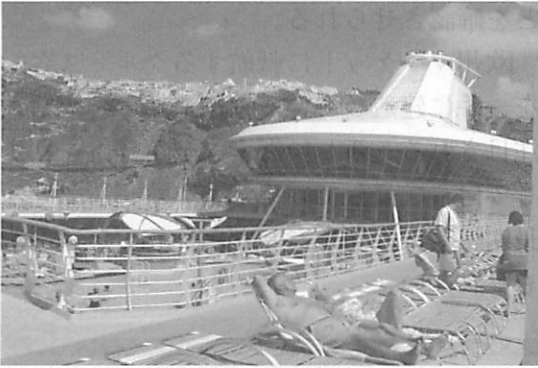
本土からのフェリー棧橋の片隅に着いて乗客を降ろした。この港は絶壁の下にあり、絶壁に張り付くように建設されたジグザグ道路を、観光客の乗ったバスが苦しそうなエンジン音で登っていく。眼下にはフェリーが見え、さらに目を沖合に移せば3隻のクルーズ客船がコバルトブルーのエーゲ海の静かな水面に並んでいる。

観光バスは島内の観光地を回った後、クルーズ客船が停泊する泊地のすぐ上の絶壁上に広がる町で乗客を降ろす。この絶壁の下には小さな港があり、クルーズ客船への通船が出ている。この港には、ケーブルカーかロバの背に乗って降りることができる。ロバの通う石段は人も徒歩で歩けるが、ロバの糞尿で結構滑りやすいので結構危険だ。

サントリーニ島の観光を終えて船に戻ってデッキでのんびりしていると、なつかしい船姿が目飛び込んできた。それは元関西汽船の「さんふらわあ7」で、今は「ゴールデン・プリンス」という船名となり、クレタ島起点のサントリーニ島へのダイクルーズに就航している。昔は船仲間と何度も同船のクルーズを楽しんだだけに、この出会いにはちょっと感動を覚えてしまった。



ゴールデン・プリンセス（元さんふらわあ7）



スプレnder・オブ・ザ・シーズのサンデッキから見るサントリーニ島

停泊した船の周りで、改装された74mウェーブピアサー型高速カーフェリーが種々の試験を実施していた。ピレウスとサントリーニ島間の航路に就航するのであろう。ギリシア本土とエーゲ海の島々を結ぶ航路には、次第に高速カーフェリーがたくさん就航するようになり、飛行機との激しい競争を繰り広げている。高速船はカーフェリー化することによって大型化し、運航効率がよくなり、また乗り心地もよくなっている。こうした短距離航路の高速化は、離島航路も含めて、今後、急速に進んでいくのではないかと思う。

夕日に赤く染まるサントリーニ島を出た「スプレnder・オブ・ザ・シーズ」の船上は、早くもフェアウェルのフォーマルナイトとなった。船内では着飾った紳士淑女が、それぞれのスタイルで船旅を楽しんでいる。

翌日、船は、最後の寄港地である、ギリシアのコルフ島に到着する。ちょうど引退間近の「クィーン・エリザベス2」が沖止めをしている横を通って客船ターミナルに着岸。総トン数では、筆者の乗船してい

る「スプレnder・オブ・ザ・シーズ」とそう変わらないのだが、最上デッキから見る同船はとても小さく見えた。クルーズの世界も、着実に世代交代が進んでいることを実感する。

さて、このコルフ島は美しい島だった。島のいたるところに美しい入江や海岸があり、それを愛したオーストリア王女が建てて利用したという夏の宮殿が、今では博物館として公開されている。

このコルフ島の港では、たくさんの旧日本の小型フェリーに出会うことができた。彼女たちも、アドリア海において第2の人生を謳歌しているように見えた。

夕刻、コルフ島を出て、一路、アドリア海を北上してベニスへと向かう。その頃には船内の廊下には、パッキングしたトランクが並び、スタッフが運び出している。下船の準備を済ませた乗客は、最後の夕食を楽しみ、お礼のチップを渡してスタッフに別れの挨拶をする。劇場で、クルーズスタッフやプロのエンターテイナーによるショーを見終わると、そろそろクルーズの終わりも近い。クルーズの最後を惜しむように、どのラウンジも夜遅くまで、場所によっては朝方まで飲み明かしている人も多い。筆者のグループの中の元気な数人は、彼らに合流して結構遅くまで、飲みかつ踊っていたようだ。各ラウンジでは、最後まで、クルーズスタッフが乗客を楽しませることに専念しており、そのプロ根性には敬服をする。これがリピーターを生む大きな要因になっていることは確かだ。

翌朝、まだ真っ暗なうちに船はベニスの

客船ターミナルに到着した。横には、NCLの新造大型クルーズ客船「ノルウェー・ジュエル」が停泊している。欧州マーケットに、アメリカ水域のセコハン船だけでなく、新造の大型クルーズ客船が次々と投入されているのを見ると、現代クルーズが着実に欧州マーケットに根付いているこ

とを確認させられる。

欧州マーケットに就航するクルーズ客船を一手に建造している欧州造船界の復活が注目される。新しい海事マーケットを創生して自ら成長していくという欧州造船界の長期戦略が、功を奏したということなのかもしれない。

新刊案内

平成19年版 機構 共有船「写真・技術集」

- ◇平成15年10月～平成19年9月末竣工の共有旅客船、貨物船全船を洩れなく掲載
- ◇巻末に各種船舶の一般配置図、SES1、平成10年以降の共有船一覧表等の参考資料を収録



資料提供／ 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 技術支援部
(旧・運輸施設整備事業団 技術部)
製作・発行／ 「月刊・共有船」(有)海交新社

- 発行 平成19年12月
- 体裁 B5判 美麗仕上げ 約150頁予定(新造船約90隻、巻末付録50頁)
- 内容 ◇平成15年10月1日～19年9月末日までに竣工した共有船全船の全景写真、要目及び特徴
 - ◇各種船型の一般配置図
 - ◇電気推進船の事例紹介、平成10年以降建造の共有船一覧表ほか参考資料
 - ◇船名別・造船所別索引、船主住所録
- 頒 価 7000円(税・送料別)

※ お申し込みは、下記までご連絡下さい。

「月刊・共有船」(有)海交新社
神戸市中央区海岸通4-3-13 ポートビル502
TEL. 078-362-6982 FAX. 078-362-6878
Email kyoyu@sanynet.me.jp